

人間談話 I

周 郷 博



◆一枚のレコード

さつきレコードやってみましたね。あれはウイーンでぼくがシヨウウインドで見つけたレコードなんです。ペーター・ローゼツカールの死後五十年の記念というんで、ぼくが買いそこなったものだから、服部（孝子）さんが行って買ってきてくれたものです。

これは、どういう人の言葉であるということも知らないで、一九五三年にウイーンにぼくが初めて行った時に、ソ連の占領地区の中の幼稚園で見つけました。ソ連の占領地ですから四カ国占領下のときです。ソ連から命令された言葉はちゃんと正面に書いてありましたけどね。『ヴィッセンシャフト イストクラフト』というんでね、知識は力なり』と書いてあったけれど、ぼくが見つけたのは小さい字で壁に書いてあったんだな。

ぼくはドイツ語がよくできないんだけど、心があるとわかっちゃうんだね。これはいいことを見つけたと思ってその言葉を帳面に書いてきたんだ。そしてだれの言葉か知らないけれど書きました。そしたらそれが新聞に出て、あるドイツにいる人がドイツ語の先生と話しているうちに、それがペーター・ローゼツカールというウイーンの森の詩人で、オーストリーの青少年たちに非常に愛された人で、第一次大戦末期に死んだということがわかったんです。

で、おとし行ったら、人がわかっただけじゃなくて、レコードのジャケットの中に顔や写真が出てたんだ。それを買いそこなって帰って来たら、服部さんが買って送ってくれたんだ。それでぼくのところに全部来たわけです。

ペーター・ローゼツカールの言葉っていうのは、ソ連に占領されていただけでもウイーンの人たちは占領者に対する抵抗とし

てあの言葉を壁にいたずら書きしたと思うんです。そこが重要なだけ、

「子どもは一冊の本である。この一冊の本から我々は何か大切なことを読みとり、その一冊の本に我々は何かを書きこんでいかなければならない」というんです。

で、それから十九年もたちましたけれども、日本のことを考えると、アメリカの占領に対して私たちは子どもをうっちゃっておいような気がしますね。子どもということで抵抗すべきだったです。ウイーンの人たちが占領者のソ連に対して、横の方にいたずら書きをしていたということを、今にしてよくはわかります。それに比べると日本は、戦後の日本の教育改革と敗戦教育というもので、子ども自体、そしてついでに女まで、アメリカの思うままにさせましたね。そして今度はそれを犠牲にして高度成長というものを考えて経済大国になりました。

◆ 幼児学校

この間、中教審の最終答申ということで、幼児学校という案を出しました。

いかにも日本というのは、軍国主義の、サーベルや大砲は使わないけれど、経済力という物質の力によって大国になるうとしているようですね。そして物質におぼれるように誘導されて、

いかに精神がないかということを感じます。

毎日新聞で「幼児学校の夢」っていうんでね、中教審の答申をこう、もみくちゃにするようなことを書いてくわいていわれたんだけど、うまく書けないんです。新聞に批評なんか出ているんですけど、日本の人は政府がやったことに賛成する人たちもだね、きわめて浅薄な賛成の仕方するのね。批判する人も浅い批判なんです。

一方ではね、イデオロギーで反対している人が多いわけです。政府は、自分が何を出したって目的は隠しているんだから……。どういうことを目的にしているってことをいってくれれば、つまり私たちは教育というものをこう考えている、といってくればいいんだけどね。あそこには教育の哲学も、教育観も人間観も幼児観もないんです。だから、イデオロギーみたいなもの、に近いものを持ちだしてむこうをやっつけるという人が一方にいます。

もう一方で、それならすぐにその学校をつくって、幼児学校の先生を養成するっていえば人が集まるだろう、なんていう人もいます。なんともいいようのない話です。日本の教育界っていうのはなぜそんなに軽薄になったんでしょうか。こういう軽薄な人が日本の教育をかきまわしている、ということでは日本の不幸は深まる一方じゃないかと思えます。

ニューヨークタイムズの記事が出ましたね。ぼくもその言葉を使おうと思っっています。これは日本のためになるんですか。ってことをいいたいわけです。ぼくは日本だけを考えているんじゃないくて、日本のためになつてたつて、やっぱり人類全体の仲間入りができないようなことはしようがないと思います。

これを考えると、教育とは何であつて、幼児とは何であつて、母とは何であつて、文化というものはどういう意味があつて今まで日本人が文化をつくつて生きてきたのか。文化とはつまり、心ですよ。単に動物的な反応してらんじゃない、人間として積みあげてきた心です。そういうことを考えざるを得ない、と思います。

◆ 一九七〇年という年

きよ年、ユネスコでは、一九七〇年、変り目にきた」ということをいいました。日本でもこういう言葉は使います。実際、変り目にきましたね。沖繩問題でも何でも。しかし、日本はその変り目にきたことを本当に実感としてうけとめていないんです。変り目にきたなんていつてるけれど、これどういふ変り目なんだなんて、よくわかんないんです。でも自分が否応なしにその変り目に、地球全体をおおう人類の変り目に一人の人間として参加していることは確かなんだ。ただ、そんな責任を負う

よりも、お金にありついた方がいい、名前をうった方が得だ、と思つている人が多いというだけです。

ともかくユネスコは、一九七〇年は国際的な教育の年であると提唱して、いろいろなところで集まつたはずです。日本はそれに対してたいして反応を示さなかつた。そして、Council of Europe (ヨーロッパ共同体) が「人類の教育の年」と同時に「自然の年」といっています。ヨーロッパ全体が日本みたいに自然を汚染しません。自然を保護するなんていう言葉じゃなく、自然を大切にして、生き生きとした姿に残す、そういう年でもあつたんです。教育の大きな変り目と、人間が科学技術をいふことにして自然を破壊し汚染した、この二つは切り離せないことですからね。これをもう少し考えると、自然というものを切り離してしまつて、子どもが人類のあとをうけつぐように育つことはできない、ということを示しているんです。

◆ テイヤール・ド・シャルダン

どういふ変り目か、それは大変むずかしいんですけれど。ぼく、けさ電車の中でテイヤール・ド・シャルダンを読んでました。一九三七年に書いたものです。それを簡単にいうと、三七年、ヒトラーの戦争の始まるころから明らかに、地球全体が変つてきたといっています。今までに予想もしなかつた状態に変

わってきている、というんです。テイヤール・ド・シャルダンという人は、そういうふしぎな洞察力をもった人なんです。

「私のない地球の人」ですから。その点、人間、シモーヌ・ヴェイユと似てます。シモーヌ・ヴェイユは学生のころに中国に飢饉がおこったら絶食した、つまり地球の裏側にある不幸だって、自分と無関係じゃないと思っただけです。ところが今、日本は違います。となりで人殺しがおこっても、強盗がはいっても、なんとも思わないんです。

テイヤール・ド・シャルダンの書いたものに、なんか結論を出しちゃうのはおもしろくないんだけど、この三つは切りはなせないといっています。それはFuturisme、UniversalismeとPersonalismeだというんです。これ、知識として知ったところでちっともおもしろくないんです。しかし最初の言葉はわかりますね。きょう、あすのことじゃないんだ、きょうあすのことにとこだわっていたんでは、つまり、きょうあすの経済事情とか、政治の都合とかいうのにこだわっているかぎり、未来というものはとぎされてしまうんです。未来主義、そういう勇気がなきやだめなんです。

ところで今度は、自分の身をふりかえって考えてもらいなさい。人間がいかに横着かということをごのことで思い出さなきゃいけない。自分の都合ばかりいって、いろいろ口実をつけて

怠けようとしているんです。現在ということだけにこだわっていたら、人類はどうなりますか、もっと大事にすべきものがあるはずですよ。

イギリスのバーナード・タワーズは、きょう年京都の未来学会で話をしました。近い過去のことなんかじゃないんです。大事にすべきものは、もっと古い過去のことなんです。現在に近い過去は、やっぱり現在なんだ、つまり越えなきゃいけないんです。過去が深くわかれば、「私心」が消えて本当に未来が見えてきます。

それをもっと深く考えると、地球の過去と生命というものが進化してきた、そして人間というものが出てきて、考えるホモ・サピエンスというものになって、その人間が地球を変えてきた、その過去です。そしてそれは動物や植物とも共通している過去というものが、ずーっとあるわけです。突然天から降ってきたわけじゃないんですから。過去からずーっと流れてきている流れをうけて、今、我々はここにいるわけで、それがこのFuturismeにつながるというわけです。

Universalismeというのは、普遍主義なんていうんじゃないんです。日本語に訳すとやっぱり宇宙主義っていうんじゃないかな。宇宙全体ということを考えなくちゃ。すると、それは一方では自然科学の世界とつながり、一方ではキリスト教なんかか

追求してきた神の問題なんかとのつながりができるわけです。

三番目に Personalisme というのがある。これは、日本語に訳すとみんな意味がちこまっちゃうけれど、人格主義、とでもいいましようか。ともかくこの人格というのは、子どもでも我々でも、いろいろな、自然とか歴史とかの関係でできていきます。しかしそれは、一回しかないものです。そして比べることのできない人格というものがあるんです。今まで地球上にかつてなかった人がここにいるわけです。だからことさらに、どうでもいいんじゃないんです。けれど、その人格にならない人もいます。

この問題は幼児教育の問題と非常につながっています。

ティヤール・ド・シャルダンのこの考え方は、唯物弁証法にちよつと似てるわけですけれど、まあいいかえると、物質と生命と精神というものの弁証法です。Divergence というのは、いろいろ違ったものがあるわけです。酸素とか、水素とか、原子とか。最初にこれは、どういう場合でも素材です。それを英語でいえば the stuff of the Universe です。宇宙というものが太陽なんかができるもとしての素材です。それがまずあるわけです。

それがあわさって convergence になるわけです。質の違ったものが生まれてくるんです。それが生命なんだけれども、その

生まれてくるっていうのは emergence なんです（復元とよんでいいんだけど）ここに現われてくるわけです。つまり、物質と生命と精神、なんていう大きな問題でなく、もっと身近な問題でもいいんです。

Divergence というのは、子どもが生まれてきたら、いろいろな人がいて、そこにおかあさんもいたし、まわりに環境もあつたし、これが最初 Divergence の状態です。それが converge するんです。まわりの影響で違うものになってくる。あわさってくる。この converge して違うものが現われてくるという、全体のこういう運動が進化した状態を、要するに「愛」といっていいんです。

この三つは、先生と生徒の関係でもいいんです。ある人と子どもがあつて、そこで対話ができて、心と心がまじわって……。それはシュバイツァーみたいな言葉でいえば、ほかの人から火種が移ってきたというものです。生命というのは燃えているものですから、あざやかに燃えなくてはいけない。燃えが悪くなった時に、ほかの人から火種が移ってきた。

これは converge して一つの人格ができたというわけです。動物とも converge するわけです。動物というものが、形というものも行動している姿もわかります。そして自分と共通しているものも違っているものもあります。自然の美しさもわかりま

す。自分と違ったものでも何か一つにとけあつて影響をうけています、と converge が起こります。これで終わってしまったんでは、困難な状態で終わってしまいます。

テイヤール・ド・シャルダン は特別このことについて説明はしていません。ある人はこれを「愛の弁証法」という名前前でよびました。divergence と convergence と emergence です。

◆ 今の日本では

日本みたいな国では、人格は生まれそうもないんです。今の日本では、人間と人間が決して converge できないんです。話したってむこうは自分の利益ばかり考えているんだし……。なんか、欲と金だけで人間がわずかにくっついてるんです。それから自然との関係を考えてもらなさい。自然はぼくらに教えてくれるはずですよ。自然は本当に見ていれば、ここで converge が起こるはずですよ。そしてここに一つの人格ができると思います。ところが、自然というのは征服すればいい、おれの都合に合わないものはもう見えないんだ。小鳥が鳴いたってちょっと聞こえないんです。うちの近所でひばりが鳴くんですけれど、あの辺歩いている人は、ひばりがうるさいなんていうんです。東京の方がよっぽどうるさいです。ひばりの声に聞きつけているという時には、ここで converge が起こって一つの人格

が生まれてきているわけです、予期もしなかったところが emerge という意味です。予期もしなかった一つの人格が出現してきているわけです。

昔の日本人の方が、たとえば農民が、畑を耕していれば、稲があんなにはえちゃった、これはじつとしておれないと元気が出てきたんです。ところが元気が出ないでしょう、今は。そんなのはね、米屋へ行って買ってくりゃいいんだし……。買うとすればそれはどこかで、やむにやまれない気持で汗流して働いている人がいるから買えるんですよね。昔の人の方がやっぱり自然と対話してました。作物が出てくれば、夜明けから起きて、星が出るまで働きました。働かなければ作物に申し訳ないもの。今の人は計算しちゃうんです。

この間から考えていたことですけれど、教育するのはね、金にならない仕事です、ばかばかしい仕事だけれど、やらなきゃいけないというもんです。だから企業としてはなりたたいはずですよ。だから税金で集めたお金をここにまわすべきなんです。まだ中学生ぐらいになると実利といくらか関係づくんですけれど、幼児というのは実利があるように教育したらこわれてしまいます。金にもならないばかばかしいことなのをやらなきゃいけないんです。そしてこれをやる人がいないと人類は危険なんです。計算してみてもこれは損だからやらない、でな

まあやるけれども、だまして金をとっちゃおうなんていう人ばかりです。つまり教育というと、なんだかこれで天国へ行けそうな、うちの子もただ安全になったような感じがして、これはだますのにいい材料です。そういう悪知恵でもって教育を経営していいでしょうか。

ユネスコが教育の年という提唱をしたのは、ユネスコができた時にさかのぼらなければなりません。ヒットラーがあんな戦争をやったあと、ヨーロッパ中の文部大臣が集まって、戦争が終わる前に相談して、ユネスコというものができたわけです。ふたたびこういう暗黒なことにならないように、教育を決して手段にしてはいけないぞ、という約束をしてできたわけです。

日本の文部大臣なんかはどうもそこがあやしいんです。今まで、教育を政治の手段やなんかにした、だからこういうことになったんで、これからは決して教育を手段にはしない、そしてこれからの教育においては、人類の平和のいしずえを、育ていく子どもの心の中に、けしつぶのような種としてつくらなければならぬ、というのが戦後の教育の出発の誓いであつたはずです。ところが日本は、そんなものよりやつぱり金もうけの方がよくなつてしまつたわけです。そりゃ、島国だからやむを得ないこともあります。戦争に負けた時、本当にぼくらはやつと生きていたんですから……。だからいくらか食物がなければ困

けれど、今はちよつと食べすぎです。いくら食べても精神がなければ栄養にならない。栄養になつても肉体がふとるだけで豚と同じです。

精神がなければ物質はないはずで、精神があるから物質の意味が見えてくるんです。精神がない、欲だけにからんでいる人は、あらゆる物を、自然さえも、自分の欲にからんだ範囲内でしか理解できないんです。女を見れば性欲の対象としか見ないから大久保みたくになつちゃうんです。精神があるから、女性美しく見えてくるんです。男性にはないものをもつていますから。そうすれば男性と女性の間にも *convergence* が起つて *emergence* が起つてくるでしょう。そして両方ともかけがえない人格になるでしょう。

◆ ヨーロッパでは

ヨーロッパでは三〇年代からずつとこの戦後、日本みたいにえらく高度成長しませんが、戦争の惨禍というものを、身もつて体験してきましたから、教育と自然ということをいっているわけです。そして日本人と違って、時勢が変わつてきたらまた違う生き方がある、なんてそんなふうには思えないんです。何十年前だって、こういうことがあつた、ということは今だって忘れちゃいないんです。責任をとっているんです。日本の方は、

なんか世間のようすを見て、いくらでもかえられると、いろいろ節操を用意してあるみたいで、たえず説をかえている。こういうことはヨーロッパでは許されないことでしょう。

それで、ユネスコで一番大事なことは、教育を考え直すことだといのですが、それはといえば簡単ですけど、今までのように、知識を獲得するというのではない、というんです。ものの考え方、感じ方というものが、この時代にふさわしいように、各人の中で育つということだ、というので、いいかえると、所有、ということじゃなくて、地位を獲得するのに便利な知識をもっている、なんていうことじゃなくて、むしろ、“生きる”ということに対する態度”ができていく、ということなのです。より多くもつというよりも、生きるということに責任を感じるということが、教育の基本になるのだ、ということです。

今は、科学技術が進んできて、生活が便利で複雑になり、知識が簡単に手にはいるようになりましたが、その意味では人間から見て、知識というものが味を失ったわけです。印刷物がいっぱい出ています。ソクラテスのころだって、ダビントのころだって、そんなに印刷物なんてないです。自分で考えなきゃならなかったし、本というのも、教会に行って一冊の聖書を見るしかなかったわけです。今は週刊誌とか本とか、知識がごろごろしています。でも、知識自体は味を失って、老衰しちゃって

いる時代です。

知識を生かすものは人間です。人の知識をちよつと借りて、なんか人よりもよけい知識をもっていれればいいと思つていますが、その人の心や、脳の働きをたるんだものにしちゃうわけです。だから、より多くもつより、“生きる”ということを学ばなければいけないんです。

自分がさずかった生命というものに対して、責任をとることで、そして自分だけじゃなく、動物や植物まで含めて地球全体の現象について、人間はそれをおかしてきたんですから、それに対して責任をとるという生き方を学ばなきゃいけないんです。これもテイヤール・ド・シャルダンのいう *Personnisme* です。

ぼくは園長をしているものですから、一人になって、勉強したことをもう一度自分のものとしてつくりだしてみ、はっきり理解してみるという時間がほしいわけです。そしてそういう *reflection* (省 || 自分を省いて “見る”) が今、教育において必要なんです。それは哲学、といつてもいいし、思想といつてもいい。イデオロギーで間に合わせるものじゃないのです。目先のことから距離をおいて、自分の考えをはっきりさせるということです。それをぼくはもてないでいるんです。

(つづく)